

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：25406

研究種目基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520683

研究課題名（和文） 中世巖島神社における神仏習合観の変容

研究課題名（英文） Transformation of Shinto syncretism view in the Middle Ages
Itsukushima Shrine

研究代表者

松井 輝昭 (MATSUI TERUAKI)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70310836

研究成果の概要（和文）：巖島神社の社殿が建つところは、オオナムチ・スクナヒコナの神の故地と伝えられる。熊野修験の支援でこの地に熊野本宮の写しが創られ、新たな来世往生の霊場が生まれることになった。中世前期の巖島大明神は、来世往生の願いを叶える神として信仰を集めた。ところが、巖島大明神は室町時代後期頃には、新たに現世利益の神へとしての神格を持つようになっていた。さらに、戦国時代初頭には、福德の願いを叶える弁財天の評判を得ていた。しかし、巖島神社の神仏習合観が大きく変容しても、その基底には海の神龍神への信仰が伏流していたことが知られる。海上社殿にちなむ巖島神社信仰の本質は、神仏習合観が大きく変容しても変わるものではなかった。

研究成果の概要（英文）：The place where the shrine of Itsukushima Shrine(巖島神社) is located. It is said to homeland of God Oonamuchi(大己貴命)-Sukunahikona(少彦名命). A copy of the Kumano main shrine(熊野本宮) was built in the land with the assistance of the Kumano system ascetics, it was decided that hallowed ground of the afterlife death is born anew. Itsukushima Daimyojin(巖島大明神) medieval previous fiscal year, a collection of beliefs as God to grant the wishes of the afterlife death. However, in the late Muromachi period(室町時代) around, Itsukushima Daimyojin was supposed to have a deity as the God of this world benefit new. In addition, in the early Warring Stages period of around, I was getting the reputation of Sarasvati to grant the wishes of Fukutoku(福德, profit and happiness). However, the gods syncretism view of Itsukushima Shrine even if the big transformation, faith in God Dragon of the sea had been subsoil to base is known. Essence of Itsukushima Shrine faith named after the sea shrine was not a substitute Shinto syncretism view even if the big transformation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学、日本史

キーワード：日本史・思想史・神仏習合・巖島神社・龍神信仰・弁財天信仰

1. 研究開始当初の背景

(1) 厳島神社は厳島(宮島)北側の海浜に建つ内宮、海を隔て4キロメートルあまり真北の本土側にある外宮からなる。今日では宮島の内宮をもって厳島神社を代表させ、外宮のほうは非常に影が薄くなっている。しかし、厳島神社の神事・祭礼のうち、安芸一宮としての国衙祭祀にちなむものは、なぜか外宮にしか伝えられなかったのである。ところが、内宮で営まれてきた神事・祭礼のほとんどが、平安時代末期の「平清盛時代」以降に始まったことが知られる。

(2) 厳島神社関係で「御前」と称されるのは、内宮・外宮の本社の他に、弥山山麓に立地する滝宮がある。この「滝宮」という名称は、真上にある白糸の滝に由来する。そして、この滝宮に伝わっていた神事・祭礼のなかにも、内宮より古いものがあると考えられる。

(3) 内宮の社殿は本社・客人社とも海浜に建てられており、潮が満ちてくると海に浮かんでいるように見える。このような海上社殿は平安時代末期頃には、来世往生につながる菩提心祈請の霊場となっていた。なお、室町時代の前期ごろまで、宮島にある内宮を日常的に守っていたのは、「厳島内侍」と呼ばれた巫女たちであった。

(4) 厳島内侍たちは内宮で厳島大明神に仕え、唐衣装・唐髷という異国風の装いを、この装いで神楽・田楽・舞楽などを舞い、また厳島大明神と参詣者を取り次ぐ役割をも果たしていたのである。そして、鎌倉時代後期頃になると、龍宮とからませた内侍称揚譚までに作られたことが知られる。

(5) 内宮はすでに平安時代末期頃になると、天台宗系の観音信仰(観世音菩薩)と習合が進んでいた。また、神社の背後に聳える弥山にも、同時期に天台宗系の人々だけでなく、真言宗の覚鑿流の人々まで入山し、修行に励んでいたことが知られる。しかし、厳島神社に属している供僧の本拠は、こののちも長く本土側にあったのである。彼らと弥山で活動する人々は、もともと厳島神社とは異質な存在であった。彼らは容易に融合することはなかったのである。内宮は厳島大明神の鎮座伝説などとは違って、特別な意図のもとに海浜に創られたところの、新しい聖地ではないかと考えられる。

2. 研究の目的

(1) 厳島神社の内宮の社殿が建つ場所は、滝川(現、白糸川)・御霊川(現、紅葉谷川)が海に注ぐ海浜であり、決して安全な所ということはない。内宮の社殿は海浜に建っている

がゆえに、台風のと き など海から、洪水が起これば川からも攻められる。このような災いがおこる可能性、誰であれ容易に考えることができる。それにもかかわらず、内宮の社殿が2本の川が海に注ぐ海浜に建ち続けるのは、何か特別な由緒があるからに違いない。宮島やその近隣に残された伝承に手掛かりを求め、このような危険な選択をした背景を探ることが必要になる。

(2) 内宮の社殿は海浜に建っているため、潮が満ちてくると海に浮かんでいるかのように見える。このことが当神社の在り方に対して、何か影響を与えているか否かを確認する。内宮と海神信仰との関わり、内宮と龍神信仰と結び付きなどである。内宮は「平清盛時代」が到来する以前から、菩提心祈請の霊場となっていたことが知られる。このことが同神社の海上社殿と関わりがあるか否かも検討が必要になる。厳島内侍(巫女)たちが唐衣装・唐髷という、異国風の装いで法楽の舞楽・神楽などを舞っていたことも、龍神信仰・来世往生の信仰と関わるか否か詮索しなければならない。

(3) 内宮の神事・祭礼や縁起などに、熊野信仰との関わりが窺えるものが散見する。ゆえに、内宮社殿の立地条件を始めとして、同神社の神事・祭礼や信仰の在り方などについても、両者の関わりの有無、その可能性について検討することが必要になる。むろん、日吉大社を始めとする、畿内の大社と内宮の関わりの有無についても、多角的に検討しなければならない。

(4) 内宮は室町時代後期になると、来世往生を求めた菩提心祈請から、現世の福德を求めた弁財天信仰の霊場へと、大きくその性格を転換したことが知られる。このような神仏習合観の変容がなぜ起こったのか、その思想的背景、社会的契機など多面的に検討し、整合的な理解を得ることが必要になる。また、内宮の海上社殿が存続したことが、弁財天信仰への転換と関わりがあるか否かについても検討しなければならない。内宮の海上社殿が室町時代後期においても存続したので、このことと伏流する龍神信仰の関わりは無視できないように思われる。

(5) 内宮とその背後に聳える弥山とは、里宮・山宮の関係であることが、近年は自明のこのように語られている。ただ、厳島神社の内外に遺されている鎮座伝説では、このような関係を物語るものは見られない。また、弥山の頂上部にのちのちまで、毘沙門堂・求聞持信仰が栄えていたことが知られる(今日

でも静寂な環境のなかで、求聞持の修行を続ける僧侶がいる)。ゆえに、定説となっている里宮・山宮説の当否を探り、内宮の神仏習合・山神信仰がどのようなものか明らかにする必要がある。なお、里宮・山宮説が認められないならば、宮島の住人の意識をも含めて、このような考えが生まれた背景を尋ねることが必要になる。

以上、内宮が特定の意図のもとに、中世初期に創られた聖地であると仮定し、神仏習合の在り方、熊野信仰など外部との関わり、さらには神仏習合観の変容にも注目し、謎とされてきた部分に光を当て、厳島神社の本来の姿に近付くことを目的とする。

3. 研究の方法

(1)江戸時代前期に作成された厳島絵図(大願寺蔵)を利用し、これと現代の地図をも比較しながら、厳島神社の内宮の立地条件を探り見通しを得た。戦国時代以前の宮島の有様が、この厳島絵図の写し留められていると思えるからである。また、宮島における内宮以外の社殿の配置も、この厳島絵図で比較検討することができる。そのうえで、これら社殿に関する地域の伝承を収集し、両者を比較検討することで、宮島の宗教空間とその意味を復元することに努めた。さらに、江戸時代末期の安芸・備後両国まで、その視野を広げ厳島神社と関わりのある伝承を調査・検討した。以上の検討を行うにあたり、厳島神社に伝わる文書も参照した。

(2)内宮がいろいろな面で熊野信仰と関わりがあるとの予見のもとに、熊野大社(本宮・新宮・那智)の立地条件、神事・祭礼、信仰の在り方、社宝、芸能、熊野修験、縁起・本地物などについて調査を行い、両者の類似点・相違点を確認するように努めた。また、春日大社・宇佐八幡宮・日吉大社などについても、内宮との関わりの有無を確認し、内宮の理解を深めるための調査を行った。なお、龍神信仰の関わりを想定し、香川県志度寺などの海神信仰についても調査を行い、内宮との関わりやその影響について検討を行った。

(3)宮島に遺されていたスクナヒコナとオオナムチ、あるいは龍燈などについての伝承と内宮との関わりを探るため、薬師信仰・粟島信仰などにも調査の範囲を広げて、内宮が設立される以前に、すでに宮島に伝えられていたと思われる信仰に見通しをつけ、内宮の理解を深めようとした。

(4)内宮が弁財天信仰の霊場であるのは、当地に遺された史料による限り、戦国時代の前期頃まで確認できない。しかし、天台宗の内

部の史料によるならば、当神社は鎌倉時代末期頃にはすでに、天川弁財天に次ぐ日本第二の弁財天の霊場であるという。なお、南北朝時代の後期になると、のちに弁財天信仰に転化する可能性のある龍神信仰が、内宮で表面化していたことが知られる。厳島神社の神仏習合観が変容した時期を見極めるには、弁財天信仰が広がり始めた時期について、何らかの見通しを得ることが必要になる。それで、弁財天信仰の中心地である、竹生島・江の島の調査を行い、さらに天理図書館・高野山大学図書館で関係史料を確認した。厳島神社の弁財天信仰と瀬戸内海交易との関わり、宮島と都方面との文化交流などについても、弁財天信仰の広がりを見出すうえで検討した。

(5)内宮と背後に聳える弥山の関わりを明らかにし、神仏習合観が変容した時期、あるいはその在り方を検討するため、江戸時代に作成された地誌を用いて、初申祭りの進め方やその荷担者、役割分担などについて、あるいはその移り変わりについて検討を行った。また、宮島の住民の内宮と弥山についての意識を探るため、18世紀末頃から描かれるようになる厳島絵図を、明治時代のもので広く収集し、それを編年に並べることでその描き方の違いや移り変わりを確認した。

(6)厳島神社のケガレを忌む領域がどれくらい広がっていたのか、背後に聳える弥山まで及んでいたか否かを探るため、ケガレの処理方法に注目して、厳島門前町の宗教空間の在り方、さらには何がその結界となっていたのかを探った。

なお、本研究の期間内に結論を得られなかったものの、次のような二つの検討も行った。

(7)外宮の神仏習合と内宮の神仏習合を比較・検討して、その類似点・相違点を見出すことにした。また、同じ内宮でも本社と客人社、それぞれの神仏習合の違いについても検討を行った。

(8)熊野系の修験がいつから当地域で、あるいは弥山で活動を始めたのか、その詳細を明らかにすることはできない。しかし、熊野系の修験のみならず、覚鑿流の真言僧も平安時代末期には、弥山に進出し活動していたことが知られる。少なくとも、熊野系の修験が弥山に入ったのは、覚鑿流の真言僧が入山する以前と推測できる。そこで、のちに真言宗では異端とされた「覚鑿」が、いつ頃に弥山に入山したと考えられるか、あるいは真言念仏を説いた覚鑿流の教えが、内宮が菩提心祈請の霊場であることと、何らかの関係があるか否かを併せ検討した。また、「覚鑿」の名前

が江戸時代末期までも守られた由来についても、あれこれ思いをめぐらした。

以上、八つの手法を用いて研究を進め、厳島神社内宮の神仏習合の進展、その変容について検討を加えた。

4. 研究成果

(1) 厳島神社の内宮が建つところは、滝川(現、白糸川)・御霊川(現、紅葉谷川)が海に注ぐ海浜であり、海からも川からも危害をこうむる可能性がある。また潮が満ちてくると、社殿が海に浮かぶように見え、決して安全な場所とはいえない。それにもかかわらず、内宮の社殿が現在地に立ち続けるのは、次のような二つの由緒によると考えられる。一つは、この地がオオナムチ・スクナヒコナの故地で、古来聖なる場所と考えられていたこと。いま一つは、内宮の本社社殿は2本の川の中州状の所に建っており、熊野本宮の写しとして設けられた可能性があること。しかも、このような場所に本社が建てられていることは、内宮が菩提心祈請の霊場とみなされ、来世往生の願いを叶えるとされたことと関係するようと思われる。

(2) 内宮の社殿は海浜に建てられているので、潮が満ちてくると海に浮かぶように見え、海のなかにある龍宮をもイメージさせることになる。また、内宮に奉仕する内侍(巫女)たちは、唐衣装・唐髷の装いで舞楽などの舞いをするので、当神社に参詣者したものは異界に足を踏み入れた思いになる。その結果、『法華経』を代表する「提婆達多品」にある、龍女成仏譚がここでは現実のものとして実感することができた。つまり、内宮に参詣した人々の多くは、成仏した龍女がおられるところにいる思いになったという。しかも、内宮で厳島大明神に仕える内侍は、折々に参詣者の願いに応じて、来世往生が叶うと託宣したようである。ゆえに、海上社殿と異国風の装いで舞う内侍がいる内宮には、菩提心祈請の霊場としての条件が揃っていた考えることができる。そして、この菩提心祈請の霊場としての評判は、南北朝時代前期までも伝えられていたことが知られる。

(3) 平清盛が平安時代末期頃に厳島神社を崇敬するようになった理由は、「平家納経」の願文を信じるならば、同時代の多くの人々と同じく来世往生の願いを叶えることにあったといえる。なお、平清盛の厳島信仰は『平家物語』の諸本によれば、厳島神社と弘法大師、そして高野山との関わりが描かれている。ただ、平清盛が足しげく厳島神社に参詣したのは、このような来世往生への願いというよりも、現世利益への期待が大きかったものと

考えられる。また、「旅の神」としての、大明神への期待も大きかったと思われる。ただ、これは観世音菩薩と習合した、厳島大明神に対する期待というよりも、この神がもともと持っていた、瀬戸内海交易に対する独自の役割に由来するものとすべきであろう。

(4) 厳島神社は天台宗内部の史料によれば、鎌倉時代末期に天川弁財天に次ぐ、日本第二の弁財天としての地位が与えられていた。しかし、このような弁財天信仰の徴証といえるものは、この地域において見出すことができない。ただ、内宮でも南北朝時代の後半になると、弁財天信仰に発展する可能性のある、龍神信仰が次第に前面に出でてきた。内宮における龍神信仰の肥大化は、こののち室町時代前期までも続く。そして、肥大化しつつあった厳島神社の龍神信仰は、戦国時代初期頃までに福德を祈る弁財天信仰へと転化する。このような龍神信仰から弁財天信仰への転化は、次のような二つの要因によって促されたものと考えられる。まず、近江国の竹生島に始まる弁財天信仰が、この頃に畿内方面で高まりを見せ、その影響が西国にも及んでいく。いま一つの要因として、室町時代以降の瀬戸内海交易の高まりを挙げることができる。厳島神社が鎮座する宮島は室町時代後期になると、西国における瀬戸内海交易の分岐点の地位を占める。その結果、厳島大明神にも新たな神格を帯びることが期待されるようになる。内宮で肥大化しつつあった龍神信仰は、こうして弁財天信仰へと転化する。内宮における神仏習合観の変容は、伏流していた弁財天信仰を前面に引き出し、新たな形を採ることで達成されることになったといえる。

(5) 内宮の初申祭は平安時代末期に始まったものであるが、この祭りのなかに神が冬に山に戻る「御燈消」という神事がある。従来は内宮と弥山を結び付けるとき、この神事を有力な論拠の一つとしてきた。しかし、「御燈消」の神事が初申祭に加えられたのは、社家たちが宮島に移住した15世紀中頃以降と考えられる。このことが内宮と弥山を結び付ける論拠にはなりえない。なお、こののち4世紀あまりを経た19世紀の前期に、弥山を内宮の「奥の宮」とみなす考えが現れる。これは今日の通説のように、内宮を里宮、弥山を山宮と見なすものである。だが、これは来島者を弥山に案内することを生業とした、島人のあいだでの理解でしかない。さらに、神仏分離を経た明治十年代以降に板行された厳島絵図になると、弥山の頂上にある巨岩(頂上岩)と本社背後の後苑と本社をつないだような図柄が現れる。この図柄は明治二十年以降の国家主義の台頭のなかで不動のも

のとなる。内宮を里宮、弥山を山宮と見なす考えが、絵柄としても定着することになったのである。ところが、弥山の頂上部にある宗教施設は、神仏分離後にほとんどが大聖院(かつての座主坊)の管轄となり、内宮と頂上岩のあいだには鳥居さえないのが現状であった。ゆえに、神仏分離後に描かれるようになった巖島絵図の絵柄は、内宮とは無関係に成立した、通念的な感覚に依拠したイメーといわざるをえない。

(6)宮島にある町場を巖島門前町といっているけれども、内宮本来の神域はかなり限られていたようである。内宮の社殿が建っている海浜の部分と、滝川(現、白糸川)と御霊川(現、紅葉谷川)に囲まれたところの、聖域性が非常に高いように思われる。内宮の神域もしくはその外延部は、これから徐々に東西に広がっていくことになるが、経の尾を越えて西側に広がることはなかった。御霊川から塔の岡を越えて、さらに東側に広がることもなかった。確かに、江戸時代前期頃には、社家の居住地域が塔の岡の山側、岡町あたりまで広がっているが、この部分に内宮に関わる社殿・仏堂はほとんど見られない。社殿が建っている海浜部分と、塔の岡から経の尾までの扇状地の部分が、のちのちまで内宮の神域あるいはその外延部と考えられ、清浄さが厳しく守られるべきところであった。また、弥山の登り口に当たる滝宮までが、内宮の神域の外延部と見なされていたといえる。なお、宮島の町場は江戸時代に入ると、塔の岡から東の方へ宮の尾の麓まで広がっていくが、神域の外延部と考えられたのは内宮の鬼門がある大弥堂までである。なお、巖島門前町の南側に当たる山岳部は、奥山と称され門前町の外の異界と考えられていた。内宮の背後に聳えている弥山は異界であり、聖域性を守るための規制の対象外であったのである。

(7)巖島神社の内宮・外宮はとも同じ神々を祀っているから、神殿も同じく本社と客人社からなると説明されている。しかし、内宮と外宮それぞれの神事・祭礼は、全くといってよいくらい異なるわけだから、これは後代の作為の所産ではないかと考えられる。なお、外宮では御旅所神事が続いてきたためか、内宮のようにケガレを厳しく忌むことがなかった。外宮の御旅所の近傍に置かれた宿院村は、宮島から出産などのケガレに触れて退避してきた人々が身を寄せる場所であった。また、内宮・外宮とも同じく天台宗が伝えられていたといっただけで、外宮には内宮のように菩提心祈請の霊場としての評判は見られない。新たな聖地である内宮には神仏習合においても、外宮とは異なる特異な展開があったものとせざるをえない。ただ、内宮でも本

社と客人社のあいだでは、僧侶や法会などに関して相異なる対応が見られた。本社は客人社とは異なり、神仏隔離の色合い後代まで認められた。これは本社と客人社の成り立ちが違っていたからであろう。

(8)平安時代後期頃になると、弥山でも熊野系の修験などが活動していた。また、熊野系の修験は内宮とも、何らかの関わりがあったようである。しかし、弥山で活動する宗教勢力が、内宮と交わり一体化するのは、かなり時代が下ることになる。ただ、両者の関係は全く疎遠ということではなく、互いに有形・無形の交流があったことは否定できない。ところが、弥山で活動していた宗教勢力は、全くといってよいほど史料を遺さなかった。彼らの活動について、その具体像を描くことは困難である。なお、内宮が菩提心祈請の霊場とされたこととも、弥山の宗教勢力が何らかの影響を与えていたと考えられる、このことの実態もほとんど明らかにならない。ただ、高野山から追放され、異端とされた覚鑿もしくはその一流の足跡が、なぜか弥山にのちのちまで残る。覚鑿もしくはその一流が、弥山で活動することができたのは、彼が熊野とも関係が深い、仁和寺の僧であったためと考えられる。覚鑿もしくはその一流が弥山に入ったことと、内宮が菩提心祈請の霊場になったことと、どちらが先かは明らかにできないけれども、無関係であったとは考えることはできないように思われる。

以上、内宮の神仏習合の在り方、その変容の仕方、さらには内宮が置かれた客観的な条件などについて、8項目に分けて述べてきたわけであるが、さらにその神仏の質について触れて結びとする。

(9)内宮の神仏習合の質について考えるとき、神事・祭礼と仏教との関わりに注目するならば、次のような二つの現象に気付く。内宮が平安時代の後期頃に菩提心祈請の霊場となり、室町時代後期に弁財天信仰の霊場へと転換しても、これらのことが内宮の神事・祭礼とほとんど結び付かないということである。つまり、菩提心祈請の霊場であれ、弁財天信仰の霊場であれ、このことが内宮の神事・祭礼の在り方にあまり影響を与えなかったということである。巖島神社の神仏習合は皮相的なものであり、あるいは噂のレベルで止まったといえるかもしれない。なお、内宮が菩提心祈請の霊場とされ、ついで弁財天信仰の霊場へ変わったことは、その底流で海上社殿にちなむ、龍神信仰と関係していたことも忘れてはならない。内宮の潮が満ちてくる海浜に建ち続けていることが、この神社の在り方を今にいたるまで規定し続けているといっ

てよいであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 松井輝昭、厳島門前町の宗教空間構造に関する一試論—ケガレの処理方法を中心にして—、宮島学センター年報、査読無、2号、2011、1-9
- ② 松井輝昭、厳島神社の海上社殿と龍神信仰—新たな聖地のアイデアをめぐって—、中世文学、査読無、56、2012、40-48
- ③ 松井輝昭、海上社殿が彩なす中世の厳島神話、芸術文化雑誌、査読無、31、2012、21-25
- ④ 松井輝昭、厳島神社の弁財天信仰の成立とその性格、県立広島大学人間文化学部紀要、査読無、8、2013、71-82
- ⑤ 松井輝昭、厳島神社信仰における弥山の位置、宮島学センター年報、査読無、3・4、1-11

[学会発表] (計 4 件)

- ① 松井輝昭、厳島神社の海上社殿と龍神信仰—新たな聖地のアイデアをめぐって—、中世文学会秋季大会、2010. 10. 23
- ② 松井輝昭、中世厳島神社における弁財天信仰の成立—福神信仰との関わりをめぐって—、広島史学研究会大会、2011. 10. 30
- ③ 厳島神社における海上社殿に関する補考、中国四国歴史学地理学協会、2012. 6. 10
- ④ 厳島神社信仰における弥山の位置、日本宗教文化史学会大会、2012. 6. 23

[図書] (計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松井 輝昭 (MATSUI TERUAKI)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70310836

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：